

4 まちなみと色彩

～景観デザインの視点から見た煉瓦の可能性～



加藤 幸枝
KATO Yuki

色彩計画家

自然やまちなみに溶け込んだ煉瓦建造物は風景画や風景写真の題材にふさわしいと思う人はたくさんいるだろう。それは煉瓦には他のマテリアルと異なる特性があるからではないだろうか。色彩的な観点から煉瓦の魅力を語っていただく。

まちなみを構成する要素としての色彩

地域に長くあるもの・蓄積されてきたものの色彩を知り、それらを尊重することにより地域固有の風景を育てて行くという環境色彩の手法は、フランスのカラリスト、ジャン・フィリップ・ランクロ氏が提唱した「色彩の地理学®」という方法論が基盤となっている。

「地域には地域の色がある」という思考は、ランクロ氏が1961～1962年にかけて京都市立芸術大学建築科に留学していた際、着物に見られる独特の色彩、古い木のグレイやダークブラウンの微妙な色合い、何気ない日用品に使われている色のヴァリエティの豊富さなどに強く影響を受けたことが発端となっている¹⁾。その後、自国に戻った際フランスの「土地の色」に着目するようになり、近代化により既に失われつつあったフランス独特の色を保存するという、特に文化的な見地からの研究が長く続けられた。

ランクロ氏が実践してきた手法は環境を構成している様々な要素を総合的に捉え、色彩という切り口からまちなみの構造を明らかにしようとする試みである。まちの色にはその土地の気候・風土はもちろん、地域の文化（歴史、宗教、習慣）等が反映されており、ランクロ氏の3冊の写真集『Couleurs de la France (フランスの色彩)』『Couleurs de l'Europe (ヨーロッパの色彩)』『Couleurs du monde (世界の色彩)』では、地域の特徴の差異が素材と色彩によって明らかにされている。

色・素材が「居づらい」現代都市

ランクロ氏が日本を訪問した際に感動したという色

彩は、木造の住宅や釉薬の瓦、あるいは「塗装」ではなく植物から抽出した汁液等を発酵・熟成させたものを「浸透」させた木格子等、グレイッシュで深みがあり、繊細な色幅・色むらを持った「素材色」であった。しかし1960年代初頭の京都と現代の日本（特に大都市圏）とでは建築の外装材は大きく変化している。

1970年代以降、均質な人工建材の激増、あるいはガラスや金属を主体とした高層建築物の林立により、さらに工法・構造の多様化により木や瓦、そして煉瓦等の素材は、特に都市部には「居づらく」なっているように感



写真1 測色風景。対象物にJIS色票等をあて、色相・明度・彩度を読み取る

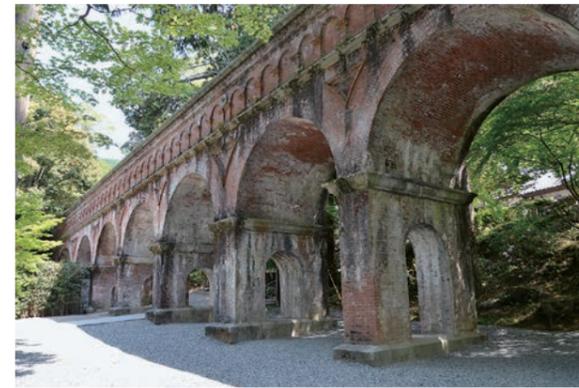


写真2 琵琶湖の水を京都市内へと運ぶ水路閣

じる。もちろん伝統的な工法の新しい木造住宅も建設されているし、煉瓦や質感豊かなせっき質のタイルを用いたオフィスビルや集合住宅等も数多くあるが、周囲の環境が極端に高亮化（明るくなる現象）したり、無機質なマテリアルのみで構成されている中にあると、どうにも肩身が狭そうに感じてしまう。

なぜ煉瓦に惹かれるのか

一方、建築・土木の専門家と協働する機会の多い私の周囲には、煉瓦造りの建造物の文化的な側面や価値を評価し、敬意や愛着を持つ人は多い。京都南禅寺の水路閣などは、その代表例であろう。

煉瓦を好む理由は人それぞれであろうが、私の場合、ひとえにその「色合い」である。「どうしてこんなに多様なのにまとまりがあるのか」、あるいは「人工物でありながら自然にここまで溶け込んで見えるのは何故なのか」等ということが気になって仕方がない。一時期はそうした素材が持つ色を丁寧に色票化することにより「むら」の程度や「色幅」の範囲を定義することはできないかと



写真3、4 スリランカの大地、緑、空とその土地の煉瓦



躍起になったりもした。

その後様々な専門家に出会い、煉瓦の製造方法の変化や建築の工法・構造の変遷を知ることで、かつてのような色むら・幅を持つ個性のある煉瓦が現代では「製品」として成り立たない・成り立ちにくいこと、工期やコストに見合わせる事が難しくなりつつあること等を知るようになり、新しいプロジェクトに旧来の煉瓦の色合い・風合いをいたづらに求める衝動は次第に薄らいで行った。現在ではもう少し別の視点から新しい煉瓦の居場所を考え、実践に繋がる様な仕組みを構築して行くことが必要だと考えている。

煉瓦にふさわしい居場所を風景から考えてみる

例えば私達は山や海・川を眺める時、あるいは煌々ビル群の夜景を眺める時、自然に眺望のよい場所を探そうとする。対象と少し距離を置いた眺めからは木々の緑の濃淡、水の表面の揺らぎや全体の大きなうねり、光の集積を捉えることができ、全体を眺めることにより微細な色の変化やその階調を見て取ることができる。そして、対象に徐々に近づいて行くと素材のテクスチャーに眼が行くようになる。近づいて初めてわかる、色むらや細かな陰影。煉瓦をはじめゆらぎのあるマテリアルの良さは、こうした距離の変化と呼応できる点にあるのではないだろうか。ガラスや金属等、フラットで均質なマテリアルで覆われた都市のビル群の近景・近接景は遠景で見た時のそれと驚くほど差違が感じられないことも多い。

あくまで色彩の観点だが、粒子の集積（土を練って焼成したもの）である煉瓦の目地まで含めた「色の特性」が活きる使い方をすることが、煉瓦にとってふさわしい居場所となるのではないだろうか。例えば長い距離



写真5 (左) 現在でも住宅として使用されている中国湖北省武漢市の外国人居住地区
写真6 (右) 中国湖北省武漢市の鉄工場の旧住宅。近隣のビジネス街の開発と共に整備予定だが、この煉瓦造の住宅は残す方針

のある塀やアプローチの床、アイストップ的な役割を持つシンボリックな建造物等であり、実際そうした場所・部位に効果的に煉瓦を用いている計画は数多くあるだろう。

調和を感じる風景—全体の色彩調和という視点

ここでもう少し煉瓦の「色彩的な役割」を解いてみたい。色彩学という学問においては、色の基本は3原色(赤・青・黄、または赤・青・緑・黄の4原色)であるとされている。ちなみに古代日本では色は赤、青、白、黒しか存在せず、山や樹木の緑等も「青し」と表現されていた。ゴッホの多彩と評される作品も実は赤・黄・青・緑の4原色だけで構成されている。

色彩学という学問においては各色の好き嫌い等をさておき「調和をなす」という定理があり、誰もがバランス

よく・心地よいと感じやすい配色は色彩の調和論により証明することが可能である。眼は単一色には満足せず、それと対立(対比)する色を求め、というゲーテ²⁾の論説もこのことを裏付けている。

音は様々な音階を組み合わせることでリズムが生まれ、ハーモニーを奏することで「音楽」となる。色も同じように単色で善し悪しが決まるのではなく、周辺環境を含めた他の色と組み合わせられることで初めて「色彩」となり、様々な効果やニュアンスが生み出されて行く。

このような「色彩学上の調和の観点」を風景に当てはめてみると、大地の赤、自然の緑(黄+青)、空の青、という風景は3原色(ないしは4原色)が揃った色彩的な調和が感じられる状態である、と言い換

えることもできる。ここで、もしも煉瓦が赤(系)色でなかったらと考えてみて欲しい。例えば東京駅なども、絵に描かれるような特徴ある風景にはなり得なかったのではないだろうか。

どこにでもある煉瓦、日本ならではの煉瓦

近年、計画のための調査に中国やインドネシアを訪問する機会が増えている。「煉瓦は世界中どこにでもある」と聞いていた通り、郊外へ行けばいくほどその辺に転がっているような素材であり、それが現代でも人々の生活と共にある場合には、ある種の羨ましさを感じることも多い。

2015年春に訪問したスリランカでもあちこちで煉瓦が見られた。1982年に世界文化遺産に登録されたシーギリヤ・ロックでは約1,600年前に建設された王族の為



写真7 スリランカ・シーギリヤの沐浴場



写真8 スリランカ・シーギリヤの遺産の修復

の沐浴場が発掘され、当時の姿を今に伝えているが、岩山に向かって左半分の側は敢えて手は加えず、右半分の側のみ崩れてしまった部分の補修や復元が行われていた。空間が損なわれても素材は残り、歴史や文化の証人となっている。

どこの国や地域にもある素朴なマテリアル、煉瓦。国ごとに寸法が微妙に異なるのは、人が手に持って積んでいくために持ちやすい大きさが基準となっているからだという。素朴さの中にも国ごと・地域ごとに扱いやすいよう、そして気候や災害にも耐えられるような様々な工夫がなされ、進化もしてきている。日本の煉瓦の歴史は世界と比べるとまだ浅いが、その時々で設計者や職人が工夫を凝らし、美しく「積む」ことに拘ってきただけでなく、歴史に対する信頼(=人類の拠り所)ということなのではないかと考えている。

新しい煉瓦の居場所の創造に向けて

まちなみの色彩が豊かで、そして調和のとれた状態が構築されるために、色彩の専門家として私ができること・すべきことを常々考えている。端的に表すと色彩論を活用した定義として「絵に描きたくなる(あるいは写真に撮りたくなる)ような風景を育てていくために風景全体で配色のバランスを取るべし」ということになるが、煉瓦(色)の場合は対象となる建築や地域に対し向き・不向きはもちろんあるし、厳格な精度が要求される構造物にも通じにくいことは重々理解している。また、私がそういう設計をできるわけではないので、そうなるに残るは他力本願である。

例えば自分より若い世代が、とにかく実際に素材に触れること・その成り立ちを知ること。そうした機会を増やしていきたいと思い、2012年2月に素材色彩研究会MATECO(環境を取り巻く素材や色彩に関する自主研究・勉強会)を設立し、タイル工場の見学会や煉瓦積職人に話を聞く会等を主催している³⁾。また、所属しているNPO法人GSデザイン会議内に設立した素材色彩分科会では、2014年に竣工した上州富岡駅の建設途中の現場にて煉瓦積の見学会等を企画・運営を行い、これらの活動をアーカイブしていくことを続けている⁴⁾。

〇〇愛好家という立場に強い憧れも持つが、煉瓦に関しては自己内で完結させてしま



写真9 GS素材色彩分科会で開催した上州富岡駅の煉瓦積現場見学会(2013年11月)

ってはあまりにも勿体ない、という思いがある。ランクロ氏が日本の色彩文化に触発され、緻密で客観的なリサーチという手法で開花させた「色彩の地理学[®]」という思考には、未だに学ぶこと・学ぶべきことが数多くある。日本の煉瓦も長崎、横浜、そして新しいところでは上州富岡駅と歴史や地域の状況・特性に応じ発展・進化してきたし、これからの発展の速度は急速ではないかもしれないが、それでも時代と共に変わり続けて行くことであろう。

良いものをつくる、そしてそれを継承していくためには様々な物事の決定を迫られる。その時、少なくともここから前後50年というスケールを強く意識することがこれから益々重要になるのではないかと考えている。

<参考文献等>

- 1) カースタイル別冊/色彩の地理学 三栄書房 1989年
- 2) 色彩論(ちくま学芸文庫) 木村直司訳 2001年
- 3) 素材色彩研究会MATECO (<http://matecosairo.tumblr.com/>)
- 4) GS素材色彩分科会 (<https://ja-jp.facebook.com/gsmaterial.color>)



写真10 素材色彩研究会MATECOで開催している連続セミナーの資料(煉瓦職人・高山登志彦氏とマテリアルディレクター・田村柚香里氏の対談形式のレクチャー)